

【翻訳】

## 風に舞う旗

——中国現代詩選（その一）馮至「北游」「十四行集」

Feng Zhi, 'Voyage to the North' and 'Sonnets'

Isamu NISHIMAKI

馮至著  
西槇 偉 訳

要旨

This is a Japanese translation of a modern Chinese poet and scholar Feng Zhi's two poems, *Beiyou* ('Voyage to the North') in 1929 and *Shisihangji* ('Sonnets') in 1942.

キーワード：中国現代詩 馮至 北游 十四行集

〔訳者序言〕

十年以上も前の一時期、中国現代詩がわたしの心を占領し、わたしの心の糧となったことがあった。「中国現代文学概説」という授業を担当することがきっかけで、わたしは体系的に中国現代文学を読もうと試みた。小説も読み、授業でも取り上げたが、詩のほうがわたしには印象深い。

そのころ、わたしは詩を読み、作品を選びだし、日本語に置き換える作業、つまり翻訳を楽しんだのである。原詩のイメージを思い描き、それを日本語で再現する。そこで、口について出るような日本語のつらなりとなるような心がけた。瞑想しながら、ことばを研磨するこの作業は、原詩をわがものにする過程であった。そうして、日々の塵勞でかさかさかき渴いていた心が潤ったのである。

その後まもなく、わたしは転勤し、中国現代の画家・文筆家豊子愷についての比較文学研究に専念し、中国現代詩から離れていった。

みずからの現代詩研究が深まったわけでもないにもかかわらず、このたび訳稿の整理に手をつけたのは、以下のような理由による。二〇一二年春に岩佐昌暉氏の編訳で『中国現代詩の歩み』（謝冕著、中国書店）が刊行され、本邦初の中国現代詩の通史となった。本書によって、わたしは中国現代詩の研究と紹介がまだ薄弱な分野だということとをあらためて教えられた。ならば、旧稿を点検して、それを日の目

にさらしてみようと、思い立ったのである。

初回は馮至（ふう・し Feng Zhi 一九〇五～一九九三）の作品のみを選んだ。馮至については、すでに秋吉久紀夫氏の翻訳（『馮至詩集』土曜美術社、一九八九年二月）があり、佐藤普美子氏の論著（『彼此往來の詩学——馮至と中国現代詩学』汲古書院、二〇一一年二月）がある。前者には「北游」（全集版の第五章を欠く）と「十四行集」が収められ、後者には両作品の一部が訳載されている。「十四行集」の全訳として、『風見の旗』（王榕青訳、非売品、一九五二年四月）もある。屋上屋をかける必要あるのか、と問われるかもしれない。優れた文学作品に複数の翻訳があっても不思議ではない。拙訳の成否は、読者諸賢の判断に任せたい。

詩人であり、ドイツ文学者でもある馮至は、河北省涿<sup>たく</sup>県に生まれた。一九二二年、北京大学に入学し、ドイツ文学を専攻し、一九二七年に卒業。在学中に文学結社「浅草社」「沈鐘社」に加わり、魯迅から「中国の最も傑出した抒情詩人」と評された。「昨日之歌」（一九二七年）と「北游及其他」（一九二九年）によって詩壇で地位を確立。一九三〇年から三五年まで、ドイツに留学し、ハイデルベルグ大学で博士号を取得した。戦時中、西南聯合大学教授をつとめ、その間詩集『十四行集』を刊行。建国後、現状賛美の政治詩も書いた。リルケ、ハイネ、ゲーテなどドイツ文学の翻訳も多い。

なお、翻訳に際して底本は『馮至全集』（第一巻、河北教育出版社、一九九九年十二月）を用いた。ただ、「十四行集」については詩の表題を省き、初刊のかたちに従った。ちなみに二七首の詩に付された表題は順に、「一、わたしたちはまちうけている」「二、わたしたちの体からぬけおちるもの」「三、ユーカリの木」「四、エーデルワイス」「五、ヴェニス」「六、野原の泣き声」「七、わたしたちは街を出た」「八、とおい日の夢」「九、ある兵士へ」「一〇、蔡元培」「一一、魯迅」

「一二、杜甫」「一三、ゲーテ」「一四、画家ゴッホ」「一五、馬のキャラバンが列をなして」「一六、山の高嶺にならびたち」「一七、野の小道」「一八、わたしたちは夜をなごやかに」「一九、わかれ」「二〇、おおくの顔と声とを」「二一、ふきふる雨の音に耳をかたむけ」「二二、夜ふけしかも山にかこまれ」「二三、うまれたばかりの数匹の仔犬」「二四、ここには数千年まえ」「二五、机のうえには用具があり」「二六、わたしたちは日々、小道をあるいて」「二七、ながれ、あふれてかたちない水を」となっている。

長詩「北游」は一九二九年一月六～一七日『華北日報』副刊第三～一二号に発表された。後に『北游及其他』（北平沈鐘社、一九二九年八月）に収録。その際、第五章「雨」が抜け落ちたが、『馮至選集』に収められた。全集版は同書にもとづき、第五章を収録している。

『十四行集』は一九四二年五月桂林明日社より刊行され、一九四九年一月上海文化生活出版社から再刊され、その際作者による序文が付された。二七首の十四行詩は一部『文芸月刊』『文芸時代』に掲載されたこともあり、後にすべて『馮至詩選』『馮至選集』に収められた。

表題を「風に舞う旗」としたのは、「十四行集」巻末の詩にみえる詩語「風旗」にもとづくわけだが、王榕青訳と秋吉久紀夫訳では「風見の旗」としているのは正確とはいえない。とはいえ、推敲の段階でこれらも含め、小山正孝訳（『十四行集』より二首、『感泣旅行覚之書』潮流社、二〇〇四年所収）も参照させていただいた。

## 北游

馮至

彼は肌刺す夜の風に逆らい、大きな黒い都会、すなわち人間とその悲しみのある場所への旅に出た。

——ファン・エーデン『小さなヨハネ』

## 一 まえがき

流民の群れが道にさまよい、  
女の歌い手のさびしい歌声がときおりきこえる。

ひとの世は、いつもこのようにおちぶれ、

どこにいつても耳にするのは疲れた、不満の声ばかりだ。

ぼくはとおくからの旅人、

北の大都会の中心街にやってきた。

窓のそとに鳥のさえずりはきこえず、

郊外にうつそうとした森もみえない。

空は煙突がはく濃い霧にそめられ、

車の騒音がけたたましく通りにひびく。

冬、雪がしんしんとふっても、

秋の夜、しとしとと小雨がふっても、

ひとはみな黒っぽい外套にくるまれ、

その表情は、憂うつ、憂うつ……

## 二 わかれ

ぼくは八百年の歴史を有する都をはなれ、  
うつそうとした松柏しょうはくと

あの黄色の瑠璃瓦の屋根と

赤い欄干のあずまやにわかれをつけ、

しばらくかれらには会うまい。

ぼくは自分を別世界にゆだねるつもりだ。

この旅で、ぼくの青春はすべて過去のものとなるにちがいない、

そんなことは承知している。

出かける際胸におもいえがくのはひとりのみずしらすの旅人、  
ただひとりで世界中を遍歴したかれを、

ぼくは「先生」とよびたい。

ぼくはかれの身の上話をききたい。

ふと見ると、水銀のようなひとすじのながれに

蓮の花をあしらった灯籠がゆつくりとながれてきた。

そうだ、今日は中秋だ。

ひんやりした月あかりがおもいださせてくれた。

ぼくは車窓からとびおりたかった。

ぼくはその蓮の灯籠を胸にかかえたかった。

月あかりがいかにも穏やかで幻想をさそい、

明日の運命におもいをめぐらせてくれない。

ぼくはあの蓮の灯籠をだきしめくちづけをしたい。

灯りの炎をのみこみたい。

まるでひとに指図されているかのように

灯籠はぼくにやさしさをとどけてくれた。

とうとう、灯籠がみえなくなつた。

列車がぼくをのせ林をとおりすぎ、

だれかがぼくにさびしくほほえんだような気がした。

そのほほえみはなぜか憂うつ、憂うつ……

## 三 列車にて

ぼくは車窓にもたれて、

これまでのことを考えてみた。

ふりむけば一面の荒野で、

そこに花が一輪でもさき、泉が一度でもわいたことがあったのだろうか。

ぼくは車窓にもたれて、

これからのことも考えてみた。

山がたちはだかつているそのさきに

ぼくがあゆむ狭き道、ぼくがのぼる岩山があるのだろうか。

こんな状況のなか、

ほんとうに自分の過去と手を切るのだろうか。

ゆくさきにはものおもいにふける高殿はなく、

ゆくさきには酒の友となる涼しげな老松はない。

めのまえの原野には年月をへた槐の老木しかない。

たよりなく列車にのるぼくらをあざけわらっている。

月がまるいままにかたむき、

明け方の風はしきりにふく。

車輪が音をたて、たえずうながし、

いま、この地球がとぶように回転している。

秦皇島しんわうとうで海がみえ、

山海関で長城をみた。

カモメとともに海のかなたにとんでいくこともできなければ、

万里の長城にのぼりはるかな道のりをみはるかすこともできない。

あわただしくやってきて、あわただしく去る、なにひとつしつかりとら

えられない。

あわただしくやってきて、あわただしく去る、あわただしいのが人生だ！

ぼくは夏の国からきて、

季節は秋になろうとしている。

ふる雨が冷たくなり、

空の雲がいよいよその重みをまましていく。

水辺にはしだれ柳のすがたはなく、

うっそうとした松の木もあたりにみえない。

ぼくをまちかまえているのは、

憂うつな都会と、暗く寒い冬だけ！

大地が沈黙におおわれ、

乗客はみな疲れにうちひしがれている。

だれにもいえない悲劇をこころにひめ、

憂いを縦横おりかさなるしわにきざんだ顔ばかりだ。

旅ゆくにつれ、衣服みなうすよごれて、

なおそれぞれの期待とのぞみにおもいをめぐらす。

ぼくには悲劇もなく、期待ものぞみもない。

ただぼくと車窓にむかって、憂うつ、憂うつ……

#### 四 ハルビン

怪獣のようにほえながら、

車は道という道をかけめぐる。

いっぽうでは痩せ馬がぼる馬車をひいて、

首をのばしていなく。

ユダヤ人の銀行、ギリシヤ人のバー、

日本の浪人、白系ロシア人の売春宿、

みなこの名状しがたい場所にひしめき、

十二分のご満悦をみせている。

狡賢い中国商人は、

いつだつてにやけた顔をしている。

妾たちはちぐはぐな洋服を身につけ、

はりぼてのような若者はまるい瓜皮帽かひぼうをかぶっている。

奥様方の足はほどいてはまたまきつけ、  
旦那さまのおなかはぶくぶくして豚のようだ。

「幸せ」なかれらにとつて、

町は金銀にうもれている。

ほかには体中が黴菌におかされた売春婦たちが、

茶碗ほど大きな造花を髪飾りに町をうろつく。

ぼくはまるで地獄めぐりをしているようで、

一歩一歩深みにおちていく。

ぼくには雨がふりそうでふらない空をみあげる勇気さえないのだ。

なぜなら、空をおおっているのは憂うつ、憂うつ……

## 五 雨

冷たい雨が三晩ふりつづいて、

たちまち肌寒く晩秋をおもわせた。

ぼくはひとりで行李をあけ、

一枚の間服あいぐを手にした。

ああ、隔世の感にとらわれ、間服は古墳から

ほりだされた遺品のようだ。

これがぼくの青春だったのか、

はなやかなおもかけを少しでもやどしているのだろうか。

神よ、雨のように涙をめぐみたまえ、

ぼくは青春の跡をきれいにあらいながしてしまいたい。

昨日の日はまだ春爛漫で、

花園いっぱいのも花さきこうとしていた。

今朝は間服にきがえるため、

ことのほかはやく起きた。

春への期待に胸をふくらませ、

「間服にきがえて身もころもかるやかに」

ぼくはこの間服を着てさつそうと、

真紅の太陽が地平線にのぼるまで、

朝焼けの空にむかつてあるいていった。

ぼくは太陽にむかつて大きく息をした。

あこのころぼくは恋をした、青春の恋を、

あこのころぼくは生きていた、青春の命を。

ぼくはこの間服を着てさつそうと、

黄昏の湖畔を散歩した。

水面に新月がうつり、

その新月にむかつて、ぼくは軽いため息をついた。

あこのころぼくは恋をした、青春の恋を、

あこのころぼくは生きていた、青春の命を。

これを着て、ぼくは知りあつてまもない友人をたずねていった、

運命ばかりをかきしるした詩集を手に。

青空にうかぶ白い雲をじつとみつめ、

雲をひとつまたひとつポケットにしまつておきたかった。

いまやポケットから白い雲があとかたもなくきえていき、

夢がめのまえを明滅しながら、とおぞかる……

旅路の雨景色にみいり、

こころもとなく胸がふさがる。

もはや昔のままの自分ではなく、

あこのころの服を手にこころがみだれ、季節のめぐるはやさにもたえら

れないのだ。

数か月たっただけで、

きもちがこんなにもかわるのだろうか。  
 数十年のへだたりがあるようで、  
 きもちがこんなにもかわっている。

穏やかな客人がひとり入ってきて――

「友よ、その間服はもう短すぎる、  
 もう一枚作ったらどうです」

「ありがたい、おことはとてもうれしい」

ぼくは森にひそむ獣のように、  
 息をころして森を死守する。

この間服を空の雲とみなして、  
 体にはおつてとおい日の夢をさがしもとめる。

あの日のおもかげを、

あの日のかぐわしさを。

涙はやはり雨のようにあらいながすことができず、  
 しかし涙にうるむ目は雨雲のように憂うつ、憂うつ……

## 六 公園

商店にはあたらしい品物がならべられ、

バーは酒とたばこのにおいにわきたっている。

ぼくは道をうしない森をさまよっているようだ。

「友よ、ここで死んでもいいのか」

ぼくはすっかりおびえて公園にあるいていった。

公園は秋風にさらされ、

白楊の葉が夕日にきらめき、

ぼくは光ゆらめくなかに立った。

そとを車と馬車がゆきかい、

なかは笑いと歌声がうずまく。

ぼくは目をこらし耳をすましても、

のみこめず、なじめないのだ。

おもえば、子どものころ

この世界とどんなに親しかったことか。

月姫はぼくのいうとおりにいつまでもその眉をしならせ、

ぼくの力でお日さまもその車輪をはやくまわさなかった。

ところがいま、すべてがよそよそしく、

春夏秋冬、四六時中

もう鶯のさえずりはきこえず、

ただとおくでカラスがかなしくなっている。

すべてがあやふやで、なじめないのだ。

ぼくは「自然」に声をかけ、

ぼくは「人生」にも声をかけた。

ぼくはこんなにおぼつかなくて、

どんな道があるればいい？

ぼくが敬愛するのは、

こんな先達――

かれの沈黙はけつして死を意味しない。

かれは無名のヒーローとなることをおのが責務とする。

しかしぼくは名もなく英雄でもなく、

沈黙のうちに死んでゆくしかない。

ぼくが崇拜するのは、

偉大な指導者――

かれはほくらを挫折からたちあがらせ、  
あたらしいのちをあたえてくれる。

かれはほくらを人間たらしめ、

嵐のあとにかならず明かりをともしてくれる。

しかし、よわよわしいほくのまなざしでは、

嵐のなかに一線の光もみいだせない。

ほくがうらやむのは、

情熱のために死んでいった少年と少女――

ほくらのところに

うつくしいおもいでをのこしてくれた。

ああ、ほくにはなにもできない。

こうしてほんやりながめることしかできない。

それぞれ肩に空ほど大きな空虚をかついで、

ひとびとは通りをゆききしている。

それからどこまでもなにもかも憂うつ、憂うつ……

## 七 カフェ

はてしのない夜、

もはや闇夜の包囲を突破することはできない。

いにしえの賢者哲人もたすけてはくれない、

かれらはほくより賢明なものもかかわらず、

物音がしなくなる

ああ、雨がほくの耳元でささやきはじめた。

いこう、いこう、外套をはおり、

風があれようが、雨がつよまろうが、

墓場にほのみえる鬼火だろうと、  
ほくは一点の光芒をみつきたい。

街燈がすべてきえ、

道は泥だらけ。

ここにも明かりがともらず、

ぬかるみにふさがれている。

ぬかるむ道はそのうちきれいに掃除される。

こころのぬかるみは、どうすればいい？

ほくはカフェに入り――

カラフルなシェードがきらめいて、

雨風のそとは別世界、

簡単な伴奏にうたっているひとがいる。

白いブラウスのウェイトレスに気づいて、

ほくはひとのいない隅にすわってかのじよをさけた。

それでもかのじよがやってきて、

ほくは愛想わらいをして、

「異郷の乙女よ、ほくがここにきたのは、

酒をのむためではない。

胸のうちがぬかるんでとりとめがなく、

ポケットには紙幣が余計に一枚あったから」

まだうれいをしらないその顔をみているあいだ、

かのじよはゆつくりと酒をそそいでくれた。

ほくのこころは少しも軽くはならなかった、

かえって重くなり、憂うつ、憂うつ……



## 八 中秋

中秋の夜、どの家もよろこびにみちて、  
マージャンの音が巷にひびく。

男がさげび、女がわらう。

部屋という部屋はけむった空気が充満し、  
鳥、家鴨の残骸が床にちらかり、

外ではドラ太鼓の喧騒が空をつきぬけそうだ。

役人、仲介業者、投機商人、

このときばかりはみなわれをわすれている。

かれらはだれにあやつられているのか、

自分の運命がだれににぎられているのかをしらない。

女は男のポケットにあるお金しかみえず、

男は衣類につつまれた女の体にしか興味はない。

ぼくもあるホームパーティによばれ、

赤ら顔の男がぼくにさげんだ。

「北京からこられた友よ、迫力満点で粋な都のしらべをひとつ歌って  
くれないか」

ぼくはなにもいわずにことわり、

なにもいわずに席をたつた。

熱気むんむんの蒸し鍋をでて、

冷たい月あかりのもとで、身ぶるいした。

明月をあおぎぼくはゆつくりひとりごとをいった、

ぼくはどこにいかうとしているのだろうか、と。

松花江しょうかうにエンジンつきの小舟が数隻とまっている。

北岸のさらに北はどんな様相だろうか、  
北の視界とおくはシベリヤ大陸だ。

風雪の故郷よ、

そこで人々はどのように風雪とたたかっているのだろう。

かれらは人類のために勇敢な実験をおこなっている。

ここでひとは豚小屋を天国とみなしている。

そんなやからとその子孫ははやくくたばらばいい！

ひとりで海をおよぐように

波にもてあそばされ、

一隻の小舟が

ぼくを河のなかばへはこんでいった。

おぼれた子どものように

もう母親にあえまいと観念して、

ながされるまま、まだ意識をうしなっていないゆえ、

岸辺の村がぼんやりみえる。

あの深緑の森で、

ぼくは花の精をまちわびた。

あの赤い泥壁の横で、

ぼくは寺院の鐘をきいた。

おもいではおさないかれの臉に去来し、

もうこの世とおわかれだ、すべてをあきらめるしかない。

このままぼくは川底にしずんでしまいたかった、

空のかなたの名もしらぬながれ星のように。

いままでのことをふりかえりふりかえり、

心臓の脈動に耳をすましてすまして——

あらゆるひととのこのところのかよいあい、



川風のように、きしかたもゆくすえもわからない。

## 九 教会

生と死はおなじように不思議で、

不思議な輪が両者をむすびつけている。

ぼくはその輪のなかで、

ほどこうとしてもほどこげず、にげようにもにげだせないでいる。

月あかりが一抹の靄となつてきえるのをながめながら、

口まかせに調子はずれた歌を口ずさんでみた。

この歌をぼくはだれにおそわつたのだろう、

まただれにきかせようとしているのだろう。

穏やかなながれをまえに、ぼくはみずからにといかけた、

きみのいのちの炎がもえあがつたことがいままでに何度あるのだろうか。

もえあがつたとき、

完全燃焼したことが一度たりともあるのだろうか。

二十年来ほんとうのよろこびをあげわつたことがあるのだろうか。

ふかいくるしみを一度たりとも経験したことがあるのだろうか。

まよわずながされず生きたことがあるのだろうか。

人生の目標をもっているのだろうか。

ほんとうの意味で書物をよんだことがあるのだろうか。

太陽、月、星々をほんとうにながめたことがあるのだろうか。

自分をあざむき、自分がどんな人間なのか、

ほんとうに知っているのか。

血液のながれがみだれてきて、

頭も葛藤にみちてとりとめがない。

ぼくはうつむき静かなながれをみつめ、

川はいかにも憂うつ、憂うつ……

ぼくは教会のまえを徘徊し、

神がとうにその尊厳をうしなつていく。

黄昏の鐘がかなしくひびいて、

「わたしの栄光はすぎさつた」と、ぼくにはきこえる。

鐘よ、おもいだしておくれ、

数百年まえ、

あなたの声をきいてころをうごかさなひとがいただろうか。

あなたの声をきいてふかく反省しないひとがいただろうか。

あなたの声をきいた老人はおもいでにふけり、

あなたの声をきいて若者は未来をおもいえがいた。

幼子を胸にだいた母親はあなたの声をきけば、

十字を切り、「神よ、おめぐみを」とつぶやく。

そしてさすらいの旅人や

聖地をめぐる僧侶を、みな

あなたがなぐさめた。

これらの孤独とこれらの黄昏を。

いま、かれらはあらたな真理をみつけた。

あなたがつかえる神ではない真理を。

あなたはもうかれらのかなしみをふかめることはなく、

かれらのよろこびをますこともできない。

かれらはあなたをとかし、

鋏につくりなおし、

畑をたがやそうとしている。

あなたはさびれた、世界の隅にかくれ、

さびれた、あわれな音をひびかせている。

ぼくは教会のまえを徘徊して、  
 そびえたつ建物が廢墟にみえた。  
 乞食がきたないバイオリンをひき、  
 通行人のあわれみをまっている。  
 ふと喉をふるわせ、  
 バイオリンにあわせて、ふるえた声でうたいだした。  
 おちこぼれた友よ、  
 あなたの身の上におもいをはせる勇気を、  
 ぼくはあまりもっていない。  
 あなたは時代の寵児だったのに、  
 ときのながれがあなたをこのようにかえたのかもしれない。  
 あなたは百戦錬磨の英雄だったのに、  
 いくつか重傷をおったのかもしれない。  
 もしかしてあなたは愛のためにくるしんだすえに、  
 もしかしてあなたは真理をもとめて発狂し……  
 一連の疑問がぼくのころころにうかび、  
 一連の疑問がぼくのころころにうかび、  
 一連の疑問をあなたはうたっている。  
 かずかずの運命の謎を  
 考えてもこたえがえられず、うたつてもうたいきれない……  
 ……  
 ……  
 ……  
 ああ、ここは病におかされた都会、  
 いたるところで病むものの声がする。  
 空にはうつくしい雲がなく  
 たちこめる灰色の霧がただ憂うつ、憂うつ……

## 一〇 秋はもう……

秋はもう中年の婦人のようで、  
 出産のためにやつれている。  
 冷たい川のながれはかのじよの白い腕、  
 残照を懸命にひきとめようとしている。  
 東の空とおく霧のような霧が、  
 かのじよの顔をおおい、両肩をおおっている。  
 かのじよは乙女の春を  
 ゆめみているのだろうか。  
 ひきとめられずに夕日はとうとうしずんでいった。  
 しかしかのじよはぼくのころころをひきとめた。  
 ころころには愛のぬくもりはなく、  
 おとろえの共感しかない。  
 秋よ、あなたは花さいたことがあり、  
 実をむすんだことがある。  
 ぼくは花を一輪でもさかせ、  
 実をひとつでもつけたことがあつたらうか。  
 その後、ぼくは毎晩ため息をついた、  
 さびしくふる雨の音をききながら……  
 その後、ぼくは毎朝泣いた、  
 はらはらおちる木の葉をながめて……  
 その後、ぼくは自分の詩の手帳に  
 かきつらねたのは憂うつ、憂うつ……

I - Pompeii<sup>(1)</sup>

夢は毎晩そこなし沼のようで、  
かすかすの罪悪がふかくしずんでいる。  
そんなふかみから毎朝目をさませば、

窓のそとで明けの明星がゆれておちてしまいそうだ。  
ぼくは夢のなか、

「Pompeii」の廢墟にいったことがある。

繁榮の跡をさがしもとめて、

どこかで花売り娘をみかけたような気がした。  
ため息ばかりつくぼくをよそ目に

薄紅の夕日が見るみるしずんでいった。

目がさめ、まだ夜はなかばをすぎていなかった。

街の中心の方から

物乞いのひく楽の音がいぜんきこえる。

Pompeii: 古城のおもいでを胸に、

ぼくはPompeiiというバーに入った。

酒はつぎつぎにそそがれ、

女は長い髪をなびかせうたっている。

「のもうよ、おどろうよ

今宵だけは、すべてまかせてちょうだい。

あかりのシェードを血の色に、

ろうそくは鬼火のように緑色。

明日、おかえりになれば

ここはまたもとの墓場」

陰鬱なこの歌のあわれなしらばは、

世は末と、はっきりつけている。

煙が雲のようにながれてただようのは、

火山が爆発するまえぶれなのだろうか。

爆発せよ、はやく爆発せよ。

この街の罪悪はあの日のPompeiiよりもふかいのだ。

ここで妻を毘にかけようとするやからや、

恋人をあざむこうとするやからがいる。

このひとは金銀しかみえず、

このひとはみな病菌におかされている。

ここでは娘が母親をのろい、

老人がみずからの子孫をおとしられる。

ここには真実らしきものは存在せず、

ここには紙でつくった花、紅をさした唇しかない。

ここでは星ひとつみえず、

ここにあふれているのは邪心と虚偽だ。

ぼくも辛い酒をたのみ、

わが魂をおぼれさせようとつぎつぎさかずきをあげた。

ぼくは善をおこなわず、悪もはたらかないゆえ

懺悔の涙に袖をぬらすことはあるまい。

おしあいへしあいしているこれらの男女をみよ、

今夜かれらは宇宙最後の夜をむかえている。

ほろんでしまえ、あのPompeiiのように

これらの生ける屍をまずほうむりされ!

明日にはすべてが灰となり、

太陽も月もかがやかなくなり、憂うつ、憂うつ……

## 一一二 とむじい

しらぬまに、木の葉がおちつくし、  
 月日の経めぐりにも、ぼくはおどろきと疑問を感じなくなった。  
 ぼくは部屋にひきこもり、ただ  
 「死の家の記録」の作者<sup>(2)</sup>の写真とむきあい、ほうとしている。  
 あっという間に数十センチもった初冬の雪が、  
 遠方からとどいたたよりのようだ。  
 熟睡していたぼくをおこし、  
 体中を血液がまだながれていることに気づかせてくれた。  
 ぼくのいのちはまだかれはててはいない。

松花江の兩岸はもう一面の銀世界、  
 今朝ふった雪なのに、なぜか夜の月あかりがつもっているようだ。  
 北岸の町もみえなくなり、  
 川をわたる橋もはっきりみえない。  
 まだ結氷しない河のながれをながめ、  
 「ここはどこなのだろうか」  
 「きみはしらないのか、  
 ほんとうにわすれたのか、  
 あの中秋の夜、あなたは  
 ここですべての夢をほうむった。  
 とどまることなくながれるこの川が、  
 とつくに海まではこんでいったのだろう。  
 これからどうするのか、  
 よく考えてみなさい。  
 そんなとおいところばかりみないで、

とおいところをみて空想ばかりしても無駄だ」  
 ああ、いま世界はすべてが白装束、  
 空があんなにおごそかで、  
 雪は四方をおどりまわっている。  
 雪はぼくのために、  
 いたましいとむらいをしているのだ。  
 夢をほうむったこの場所を  
 ぼくは一刻もはやくたちざりたい。  
 このようなとむらいの  
 空気はなんとも憂うつ、憂うつ……

## 一一三 エピローグ

それから部屋の窓も白く霜がこおり、  
 こころの窓はとざされたままだった。  
 ぼくは冬の虫のように  
 じっとして冬眠に入った。  
 「友よ、この一か月で一年ぐらいふけたね」  
 「年取るのはかまわない、眠ったまま死ぬのがこわいのだ」  
 それから積雪が町をうめつくし、  
 太陽もとかす熱をもっていないかった。  
 ぼくは町につもった雪のように、  
 運命の足にふみしだかれていた。  
 「友よ、この一か月で一年ぐらいふけたね」  
 「年取るのはかまわない、眠ったまま死ぬのがこわいのだ」  
 ここで寝て死をまつわけにはいかない、

青春をここにほうむるわけにはいかない、  
 ぼくはこの暗い墓場をでていきたい、  
 この憂うつにもうたえられない。

一九二八年一月一日 三時

(1) イタリアの古代都市、ヴェスヴィオ山の麓にあり、紀元七九年ヴェ  
 スヴィオ火山の爆発により町全体が埋没。一八世紀によく発掘さ  
 れた。ここはあるレストランの名である。

(2) ドストエフスキーを指す。

#### 十四行集

一

馮至

わたしたちはつねにまちうけている、  
 おもいもよらない奇跡や、  
 ゆるやかなときのながれのなかで突如に  
 彗星があらわれ、突風がふきあれるのを。  
 この一瞬のうちにわたしたちのいのちは、  
 あたかもはじめての抱擁のなかで  
 とおい日のよるこびとかなしみが突然めのまえに  
 確固たるかたちをあらわしうきぼりになる。  
 わたしたちは小さな昆虫たちを讚美する、  
 かれらはたった一度の交尾

または外敵とのたった一度のたたかいで、

そのうつくしいいのちをおえる。

わたしたちのいのちはつねにまちかまえている、  
 突風がふきあれ、彗星があらわれるのを。

二

わたしたちの体からぬけおちるもの  
 すべてを塵とほこりにしよう。

この時代にわたしたちは自分自身をおく、  
 秋の木々のように、一本一本

木の葉とおそぎきの花を

みな秋風にゆだね、幹をのばし

きびしい冬のなかへ、わたしたちは自分自身を  
 自然のなかにおく変態をとげた蟬や蛾のように

脱け殻をすべて泥に土にぬぎすてる。

わたしたちは自分自身をあな

きたる死にゆだね、歌の一節のように

声は音楽からはなれていき、

ついには音楽の胴体だけが

あおい山なみとなってつらなりたつ。

## 三

秋風にたたずむ木々よ  
 きみらはわたしの音楽、  
 おごそかな神殿をきずきあげ、  
 わたしは敬虔にあゆみいる。

きみらはまた青空にのびゆく塔であり、  
 わたしのまえにそびえたち、  
 ひとりの聖者のごとく  
 その身体で町の喧騒を浄化する。

きみはつねに身の殻を剥落させ、  
 凋落してもなおきみはただ成長するのみ。  
 小道が交錯する野をゆく

わたしにきみはよき道しるべ。  
 きみ 永遠に生きよ  
 わたしは一步一歩きみの根元の土となる。

## 四

わたしはよくひとの生涯について考える、  
 するとあなたにいのらにはいられない。  
 白いにこげのような草ぐさよ  
 あなたはその名にはじることなく

しかしあなたはあらゆる名前をとおざけ  
 その平凡な生活をいとなむ。  
 尊さ、潔さをうらぎらず、  
 黙々とあなたのいのちを成就する。

あらゆる粉飾、あらゆる喧伝、  
 あなたのまえでは、あるものはしほみ、  
 あるものはあなたの沈黙となる。

それがあなたの偉大なほこりであり、  
 あなたが黙秘するあいだに達成される。  
 わたしはあなたにいのちを、人生のために。

## 五

わたしはけっしてわすれない、  
 ヨーロッパにあるあの水の都、  
 それはこの世の象徴、  
 おおくのさびしさのあつまり。

ひとつの島がひとつのさびしさ、  
 島々はみなお友達。  
 手をとれば、  
 それは水上の橋のよう。

ほほえめば、  
 むこうの島の

窓が突然ひらいたよう。

ただひとがねしずまった夜  
窓がしめられ、  
橋のうえもひととおりがとだえたときが気がかり。

## 六

わたしはよく野原で  
村の子、または農婦が  
黙する青空にむかつてないのを見かける。  
それは親から罰をうけたためか、それとも

玩具がこわれたからか、  
夫をなくしたかなしみのためか、  
それとも傷病の息子を心配するあまりか、  
いつやむともなくないている。

全生命がひとつの枠のなかには  
めこまれているかのようで  
枠のそこには人生がなく、世界も存在しない。

かれらは昔から  
涙をながしてなくことになれているかのようにおもえた、  
このすくいのない宇宙のために。

## 七

あたたかな陽射しのなか  
わたしたちは街をでた。  
ことなる川のながれが  
合流して海となる。

おなじ緊迫感が  
わたしたちの胸に、  
おなじ運命が  
わたしたちの肩に。

この緊迫感と  
運命を大切にしたい。  
いずれ危険がさり、  
枝わかれの街路が  
またわたしたちをうけいれ、  
海が川となってわかれていく。

## 八

とおい日の夢だった、  
浮世をたびだち、  
鵬おわとりと翼をならべ  
静謐な星たちとかたりあう。



太古からの夢は年をとった

子孫の繁栄をねがう老人――

いま、星にむかうひとたちは

世をのがれるためではないのだ。

かれらはいつもまなんでいる、

どのように操縦し、着陸するのかを。

星の秩序をもたらすために

光のように空へ発進する。

いまやとおい日の夢は

人跡はなれた山奥におちる一片の隕石。

## 九

あなたは生死せめぎあうところで成長し、

ひとたびこの墮落した街へもどり、

おろかな歌声をきけば、

あなたはまるで古代の英雄が

数世紀ぶりに突然すがたをあらわしたときのように、

おちぶれかわりはてた子孫に

往時のおもかげをみいだせず、

めのまえが真つ暗になつて落胆するだろう。

戦場であなたは無敵の英雄、

みずからを青空にささげ、

ついには糸のきれた紙風となる。

しかしこの運命をうらまないでほしい、

あなたはかれらをはなれ、たかくとおく

とぶあなたをかれらはもはやひきとめることはできないのだ。

## 一〇

あなたの名はよく

おおくの名前のなかにうもれ、とくに

かわつたところもない、しかしあなたは永遠に

みずからのかがやきをうしなわないだろう。

よあけ、またはゆうぐれにわたしたちは

あなたをあけの明星、よいの明星とおおぎ

深夜ともなればあなたはほかのほしほしと

なんらことなるところがない、おおぜいの若者が

あなたの声なき啓発をうけ、

しかるべき生死をまつとうした。あなたがなくなつたいま

わたしたちがいたくおもしろいられるのは、あなたがもはや

人類の未来の仕事に参加できないということ――

もしこの世界がよみがえることができたら、

不正がふたたびただされることができたら。

一

いつだったか、ある夕べ

あなたは数人の若者に未来への力を直感した。

それから、かずかずの幻滅をあげたことだろう、

しかし、あなたは初心をわすれない。

わたしは永遠に感謝のきもちを胸に

あなたをおいでしている。おろかものにいたためつけられた

わたしたちの時代のために。

しかしその舵取りは生涯、

この世界にうけいられることはなかった——

あなたは何度微かな光をみいだしたことだろう、

ふりむけば世界がまだ一面の雲におおわれている。

艱苦の道のりをあなたはあるきとおした、

希望にみちたあなたのほほえみをさそったのは

道端の名もしらぬ草花。

一一

まずしい村で飢えとたたかいながら

あなたはつねに死屍累累の野におもいをはせた。

人間の壮麗な滅亡のために

あなたはたえず哀歌をかなでつづけた。

戦場で若者がたおれ、きずつき、

空のかなたを明星がもえつききえてゆく。

ながれる雲とともに奔馬の群れがとおくへきえて……

あなたはみずからのいのちをもつてかれらをまつる。

あなたの赤貧はかがやかしく

聖人が身にまどっていたボロ布のように、

わずかな裂きれ、一本の糸くずさえ

神々しくかぎりない力を發揮する。

あらゆる粉飾がその光のまえでは

あわれなすがたとなつてうつつしだされる。

一三

平凡な市民の家庭にうまれたあなたは

おおくの良家の娘のために涙をながし、

すぐれた君主に畏敬の念をいだいた。

八十年のあなたの生涯はほんとうにおだやかで、

ほしほしがあなたの時代をさびしくまわっていたのだろうか、

しかし、ときは一分一秒たりともとまっていなかった。

いつでもどこでも生命のきざしをみせていた、

雨がふろうが、風がふこうが、いい日和だろうが。

重い病から生きる力をえて、

のぞみのない愛をも糧とした。

あなたは、なぜ蛾が火に身をなげるのか、

一五

なぜ蛇が脱皮して成長するのかをよく知っている。

あなたの名言があてはまらないものはない、

あなたは生きることの意味をずばりいいあてた——死ぬ、そして変わる！

馬のキャラバンが列をなして、  
遠方から荷をつんでやってくる。  
水のながれもいずこともなく  
泥や砂をはこんでくる。

一四

あなたの情熱はいたるところで火をもえあがらせ、

あなたは向日葵の黄色い花をもえあがらせ、

青々とした糸杉をもえあがらせ、

そして炎暑をゆくひとをもえあがらせ——

かれらはみな熱をおびた

うったえるごとくおどりあがる焔。

一方、日陰にさいた赤い花や

とある牢獄の狭い中庭、

そしてますますしいひとたちがうつむいて、

みすばらしい部屋でジャガイモの皮をむくすがたなどは、

永遠にとけることのない氷のかたまりのよう。

あなたはそのあいだに吊り橋をかけ。

優美な小舟をえがいた。あなたは

不幸なひとびとをこちらにむかえようとしているのだろうか。

風がはるかかなたより、

よその国からため息をかすめてふく。

わたしたちはいくたの山をこえ、川をわたり、  
いつでも所有し、いつでも放棄する。

鳥が空をとぶように

つねに空を領有し、

つねに無所有である。

わたしたちの実在はなんだろうか。

とおくからなにももってこないで、

めのまえからなにももっていかずに。

一六

山の高嶺にならびたち、

わたしたちはみわたすかぎりの遠景になる。

わたしたちは荒涼とした平原になり、

平原にまじわる小径になる。

どの道も、どの川もまじわらないものがなく、  
 深く風とながれる雲がいつも仲間だ。

わたしたちがとおりすぎた町、山、川は  
 すべてわたしたちの生命になる。

わたしたちの成長、わたしたちのくるしみ、  
 それは山の斜面に根をおろす松の木、  
 それは名もしらぬ町をおおう濃い霧。

わたしたちは風にふかれるまま、水にながされるまま  
 平原にまじわる小径になり、  
 小径をゆくひとになる。

## 一七

いのちが躍動する、野にまじわる小道を  
 ながめるのが好きだ、とあなたがいった。  
 それは名もしらぬひとびとが一步一歩  
 ふみかためた、生き生きとした道。

わたしたちのこのころの原野にも  
 まがりくねった小道がある。  
 しかし、あるいていった  
 おおくのひとのゆくえはもうわからない。

さびしそうにしている子どもや、白髪の夫婦もいれば  
 ほかには若い男女もいる。

さらに、なくなった友人もいる、かれらはみな

わたしたちのために道をふみかためてくれた。  
 わたしたちはかれらのあゆみをけつしてわすれず、  
 これらの道を荒廃させてはいけないのだ。

## 一八

わたしたちはよく夜をなごやかに  
 なじみのない部屋ですごすことがある。  
 昼間のその部屋をしらずに、  
 その過去や未来はさらにいうまでもない、原野は――

どこまでも窓のそとにひろがっている。  
 わたしたちはゆうぐれどきにきた道を  
 なんとなくおぼえているだけで、それだけで  
 翌日わたしたちはでかけたきり、二度ともどらない。

目をとじよ、へだたりのない夜と  
 なじまない場所をわたしたちの胸におりこもう。

わたしたちのいのちは窓のそとにひろがる一面の野原で、  
 そこにたつ一本の木、きらめく湖水を  
 わたしたちはやっとみつける、野ははてしなくとおく  
 わすれさられた過去と、おぼろげな未来をおおっている。

## 一九

わたしたちは手をふって、わかれをつけ、  
世界はわたしたちのあいだでたちきられる。  
寒さが身にせまり、たちまち視野がひろがり、  
たがいにまるでうまれたばかりの赤子のようだ。

ああ、一度のわかれ、一度の誕生、  
わたしたちは仕事の辛勞をせおい、  
冷たいものをあたため、生のをを調理し、  
それぞれ自分の世界をたがやす。

はじめて会うごとく、再会するために  
感謝のきもちで過去をふりかえる。

初対面のときのように、ふと前世を感じることもある。  
生涯に春がいくつ、冬がいくつめぐってくるのだろう。  
わたしたちはときのうつりかわりを感じても、  
あたえられた寿命を感じとることはできない。

## 二〇

親しいかどうか関係なく  
おおくの顔と声とを  
こんなにもはつきりと、わたしたちは夢にみる。  
それらはわたしたち自身の分身なのだろうか。

それともおおくのいのちが融合し、

融合して花がさき、実をむすんだのだろうか。  
みずからのいのちを把持できる自信がだれにあらう。  
はてしなく、川面のような夜のとばりをまえにして、

自分の声とおもかげとを  
親しい者の夢にかざることができらうか。  
いくたびはるかな空に映され、

水夫や砂漠の旅人に  
新鮮な夢の養分をあたえたか、  
わたしたちはそれをしらない。

## 二一

ふきふる雨の音に耳をかたむけ、  
わたしたちはあかりのもとでこんなにもひとりぼっち、  
わたしたちはこのちいさなかやぶき屋根のしたで、  
わたしたちの道具とのあいだにさえ

かぎりないへだたりがある。  
銅炉は山奥の原石にあこがれ、  
瀬戸物の壺は川辺の陶土にあこがれ、  
それらはみな雨風のなかをとぶ鳥のように

ちつていく。わたしたちはしつかりだきとめ、  
わが身をおもうようにはできない。

強風があらゆるものを空へとふきあげ、

二三

土砂降りがまたあらゆるものを大地にたたきつける。  
つかのまのわたしたちのいのちをしめすものは  
よわよわしくともるこのともしびのみ。

二二

夜ふけしかも山にかこまれ、  
しめやかにふる雨の音をきく。  
十里はなれた隣村や  
二十里むこうにある街は、

はたしてまだそこにあるのだろうか。

十年まえの風景や  
二十年まえの夢は  
みな雨のなかにうもれている。

身のまわりがせまくて

子宮にかえつたみたいだ。

真夜中にわたしは

さしせまった声でいのるのだ。

「せまいところに

ひろい宇宙をください！」

半月も雨がふりつづいて、  
きみたちはうまれてこのかた  
湿り気と曇り空しかしらない。  
ある日空が突然はれあがつて、

日光が壁いっぱいにふりそそぐ。

きみたちの母親が

きみたちを日向にくわえ、

きみたちは体全体で

光のぬくもりをはじめてうけとめる。

日がしずんで、かのじよはまたきみたちをくわえてかえる。

きみたちはきつとわすれるだろう、

しかし、今日のおもいでは

未来のほえ声にとけこみ、

夜ふけにほえるきみたちの声に光がさすのだ。

二四

数千年まえに、もう

わたしたちはここで

いきていたような気がする。

わたしたちがうまれるよりずっとまえ

かわりやすい空のうえから  
 青草や松の木から

ひとつの歌声がこだまして、  
 わたしたちの運命をうたっていた。

わたしたちはなやみ、くるしみ  
 こんなところで

歌声などきこえるはずはない。

とぶちいさな羽虫をごらん  
 その飛行において  
 どの一瞬もあたらしいのち。

## 二五

机のうえには用具があり、  
 棚には本がならんでいる。

一日中これらの静物にかこまれ、  
 わたしたちはたえず考えつづける。

めったにうたうことはなく、  
 おどりがあがりもしない。

なぜ翼をふるわせ空をとぶのかい  
 と、むなしく窓から鳥にたずねる。

しずかな夜ねむるときにだけ  
 体がリズムをとりもどす。

空気が体のなかであそび、

塩が血のなかであそぶ。  
 夢のなかで空と海が  
 さけぶのがきこえる。

## 二六

わたしたちは日々、なれた道があるいて  
 すまいにかえってくる。

しかしこの林のなかにまだ  
 どこにいくのかわからない小道が幾筋もある。

なれない道をいけば、こころもとなく

家からますますとおくなり、まよってしまいうさだ。  
 しかし、そのうち樹木がまばらなところから  
 ふと空のかなたに鳥影があらわれるように、

わたしたちのすまいがかいまみえてくる。

わたしたちに発見されるのをまっているものが  
 わたしたちの身近になんとおおいことか。

なんでもよくしっているとおもうな、

死にさいし自分の体をなでて  
 「このひとはだれ？」と、たずねるだろう。



ながれ、あふれてかたちのない水を  
水くみが楢円の壺いっばいにくめば、  
その水のかたちがさだまる。

ほら、秋風にはためく旗をごらん、

旗はとらえようのないものをとらえている。

はるかかなたの光や、かなたの夜、

かなたの野をめぐる季節の色、

そしてかなたにむかうわたしのころ、

これらを旗はとどめようとしている。

わたしたちは夜通しむなく風之音に耳をかたむけ、

朝から晩まで枯草と紅葉をむなくながめている。

わたしたちのおもいをなにに託せばいい？

これらの詩が風に舞う旗のように

とらえようのないものをとらえられたらとおもう。